



## 津別町図書館

2023年7月、オホーツク管内で「図書館」が1館誕生しました。津別町ではそれまで運営してきた「津別町中央公民館図書室」を閉館、念願の図書館がオープンしたのです。

札幌丘珠空港から女満別空港へは45分と早いです。女満別空港から津別町図書館まではバスや場合によってはJRを乗り継いで約2時間で着きます。

札幌から特急で北見まで4時間半。しかし旭川から北見方面の鉄道本数がとても少ないので、札幌から北見へ向かう場合、高速バスを利用することもしばしば。北見に着いたら阿寒方面に向かうバスに45分ほど乗ると津別に到着します。つまり阿寒方面からも行けるということ。釧路空港から向かうという方法もあります。今回私は阿寒でちらっと温泉に入り、津別にバスで1時間もかからず行くことができました。

津別町は人口約4000人。1985年までは国鉄時代に「美幌駅」から相生線が走っていたので、津別へも鉄道で行くことができました。37キロほどの短い鉄道であいにく私は乗車したことがないです。

図書館の開館は町づくりの1つとして位置付けられています。スーパーマーケット、バスターミナル、地元ハイヤー会社と図書館による複合施設です。私のような公共交通で活動する者にとってはとてもありがたい複合施設です。

図書館は2階に入っています。階段を上がると、早速階段の踊り場に面出して「困難に挑んだ・乗り越えた人たち」と言うミニ展示を行っていました。

津別町は木材が主要産業なので、館内の書架は地元企業が製造した特殊な作りになっています。高さを全体少し低くするだけでなく、囲いにしてその真ん中の椅子で閲覧できるなどの工夫も。もちろん車椅子が通れる通路幅を取っています。

みんな大好き、お馴染み横浜の「崎陽軒」のシュウマイ弁当の容器となる経木(きょうぎ)折り箱を60年以上作っている会社が、なんと津別町にあります。ご飯から出る水分をうまく吸収して、冷めてもおいしい経木でないと味が守られないという強いポリシーによるものです。

この会社(有限会社三共)より図書館へ寄贈されたコーナー「三共寄贈文庫」を面出し中心にとっても幅を大きく取って設置しています。木材に関する図書が中心ですが、木々の周辺に集う動物にも着目し、一般書から児童書まで幅広く選書されています。『ファール昆虫記』からジビエ(鹿肉)の解体・調理、チェンソーの使い方まで、配架された図書を眺めているだけでも津別の

山林を歩いている気分になります。

ところで、津別町郊外にある工芸博物館「つべつ木材工芸館キノス」(現在臨時休館中。2025年春開館予定)の裏の丘にかばいあうように2本のエゾヤマザクラがあります。「双子の桜」とよばれております。写真家の姉崎一馬さん、詩人の谷川俊太郎さんによって、この木をテーマにした絵本「ふたごのき」(偕成社 2004年発行)が出版されています。

スーパー行く前にちらっと立ち寄って雑誌の最新号をソファで閲覧する女性、歴史小説の新刊を楽しみに訪れる高齢男性、バスが来るまで図書館に集う学生。町民の生活リズムにとっても合わせた作りになっているなと感じます。

この町ならクルマが無くても生活できそうです。

2024年11月訪問

加藤 重男